報仇
繪本高尾外傳
五

へ 13
3018
5 上

へ 13
3018
5

泉岸　思之　中村貞纂述
同　博愛　奥田頼閲正
頭書類語　小學作文教授書　全五冊
此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩ヲ惟リ作文ノ一課科ニ後ルヽヲ憂ヘ其教授ノ順序方法ト其講究スル所ヲ實地ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答會正誤文俗文摘訳等各若干ヲ初巻ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教方ヲ説キ日用簡文一二種ヲ編ス次巻ノ首ニ俗語ノ頭ヲ掲ゲ次ニ四季贈答文慶賀文書信文等ヲ掲グ
用文諸証文等ヲ編ス○第三巻首ニ方今流行ノ雅文ニ俗語ヲ挿ミ尺牘百餘章ヲ編ス○第四第五ノ
次ニ短キ未曾有ノ新例ヲ以テ漢文ノ字内外ヲ以テ
成ス○両巻ハ首ニ漢文要字助字虚字ノ解ト用例及詩ノ作例数首ヲ編シ其文
事ニ從テ其意ト作例及語ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且ツ獨學
類語ノ便ニ供ス
但其類語ニ假名ヲ以テ訓解スル語數十ヲ掲グ
テ具ニ詳ニセサルヲ知リ玉ヘ
大阪北久宝寺町四丁目　前川源七郎敬白

繪本報仇高尾外傳巻之五

江戸　楚満人著

昭和九年七月十二日 購求

第拾壹回

富右エ門ハ女房が今まざるを見てはなはだ疑ひ富「さては其方年頃不足もありて密夫を拵へ吾に毒をあたへんとするならん。憎き畜生めと髻をとつて引よせ。さて八つらんづするかど家内の男女騒ぎさわぎ。漸くこれをとりさへまづひかへにいれおきぬかくて福も今は浅ましきはじめなく高尾との中をきかんと枝様の縁切状をこしらへ書き。また浮世八をこのみてこれを飲しめ又ありしみぐさ

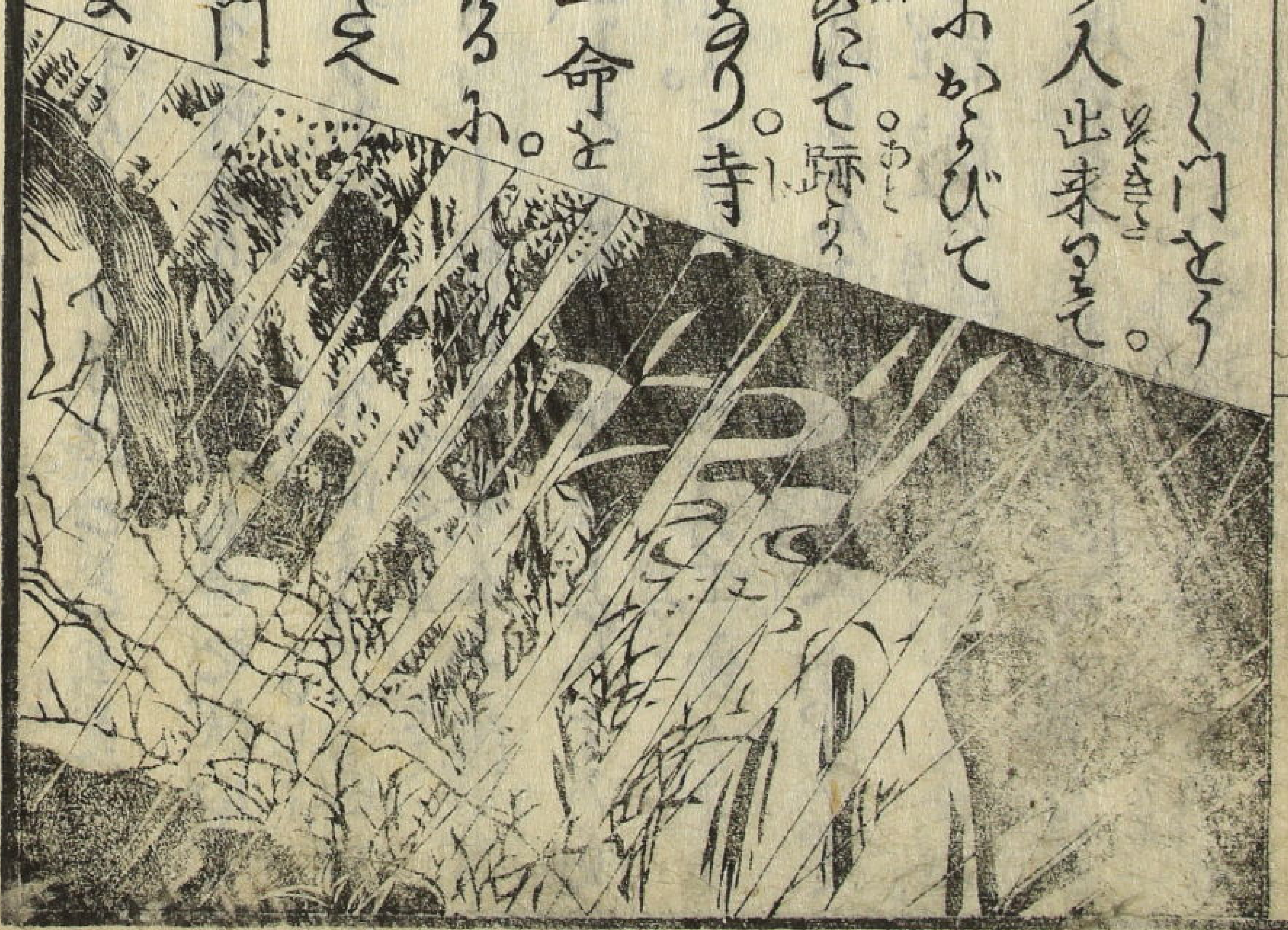
づらつけに入まゐらせんとせしなりと明白に告け
ほど家右エ門が怒りなをおさまらずかとみえしかね
うちなりとて終にハ福まで離別なしぬ兎角の事に
打まぎれて昨日より主管徳八がおしぬきあて居と
りゐるが此時むしぬく動つきしまや今戸の別荘に
ハおしぬうらく今戸へ人を走らせんとせしに彼方より来く
る人ありてをかしおく行違ひぬ今戸より来る人ハ昨
日徳八が来りく何事の高尾さんと久しく物語
して居たましが黄昏すぐるころ二個とも庭口よりや
逸徃なひし処見えまへこひ有る人ずあるによりて

昨宵総花行末をさとしありとめしかど納まざりしゆへ
據なくあらせやありといへば此方の人も今は頼りの
強動をなしぬるとも不孝家へ立入り玄のよ
しを告るに家右エ門ハさばかれまでにあまりて気積の
あまるごとく沈然とあくいたりたる。彼主管徳
八ハいかがせしや面目なく家へもかへらず。何国へかちく
てんしけて。行末も知れずなりぬとぞ。然るに千束屋が事
の下に斬られし是より嚮向阪甚内ハ草津においてひとつ年
をすごしたるが故ありて又江戸へかへりしがいかなる縁
にぞ死たれバ。草津を発足して早渡峠にさしかかりし

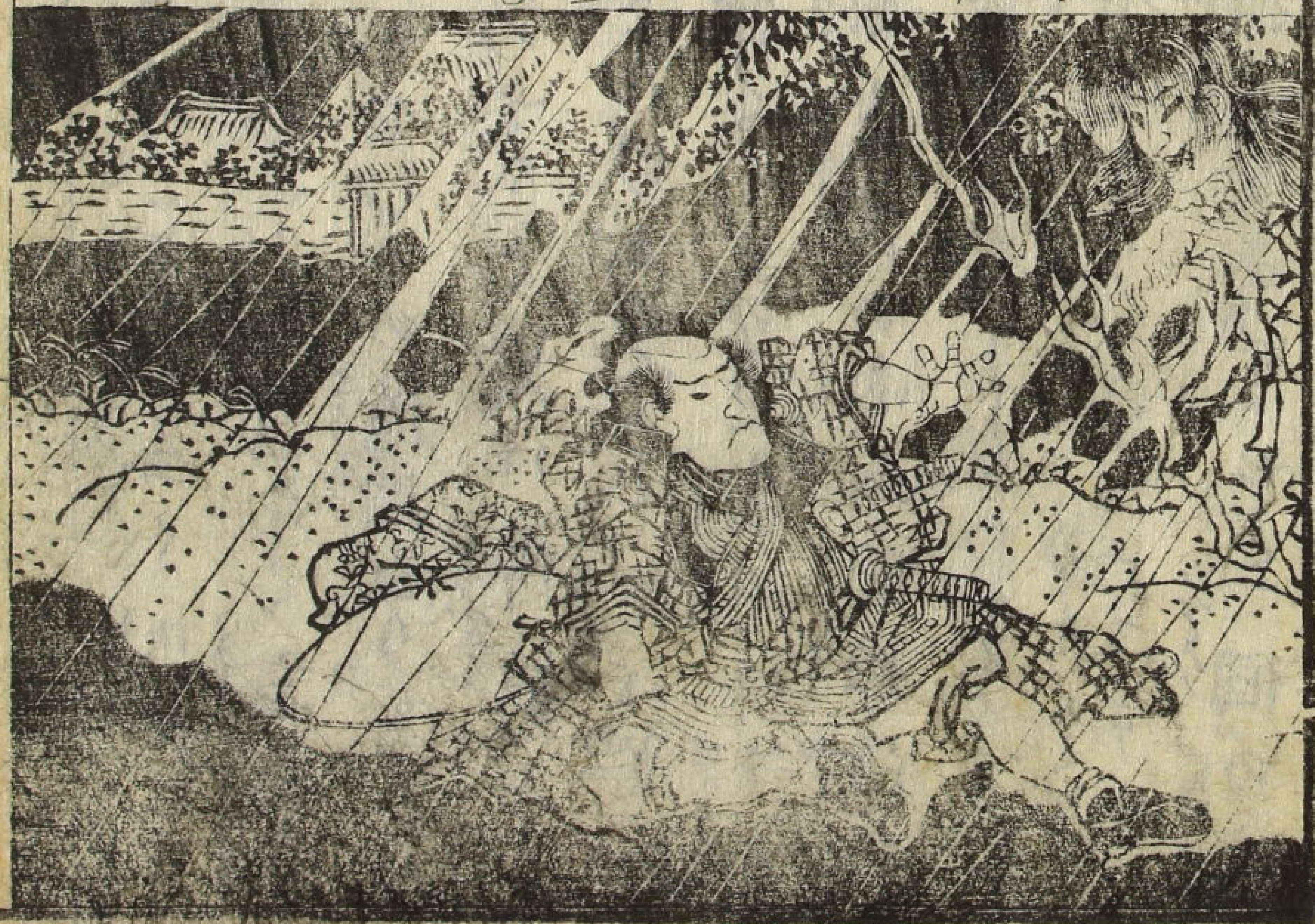
に日ハまだ高く思ひしに急に天結陰小雨降いざ
して日も黄昏に向とするに驚きあわてゝ急る
に日全く入果て一歩もすゝむ事あたハずいかゞハせ
んと思ふ折遙のあなたに火の光見ゆるにさてハ
かしこに人家ありと覚へたりたどりゆきて一夜の舎り
をこハんといそげども火の光り次第に遠くなり
ゆくまゝに行けども〳〵其所にちかづかず。こハ不思
議やとなほも足にまかせて行かとおもふに火のひかり忽地消へ
て元の闇夜となりけれバ大きにおどろきさてハ今の光
りハ人家にハあらで狐狸妖怪のしわざにありける

かと弟の手をとらへおさへんとすれしかバ是こそ幸ひ
花を突落して殺しける所なりけれバふたゝびおどろ
ろき急に走りさらんとするに後の谷間より一團の
陰火焔々ともえあがりしが花が姿血に染く
いとうらめしげなる顔色にてあとをさしてよろめ
きてさハ甚内ハ阿と叫びつゝころびつ千歩ほどはしり
逃のびてあとの方をふりかへりみるに猶追來るゆゑ
おそろしさに甚内ハ木の根岩角の隔ひなく走りけるに
此時雨止て皎々たる月藤木の間よりあらはれもれ
人跡絶て寂寞たる手に寺院と思しき門の

あれバ大きによろこびあへるしく門をとう
ち扣くに暫くありて内より人出来りて。
何方より何用ありて深更におよびて
来りしといへバ甚内ハかく〳〵の変にて跡より
幽霊のおつかけ来るものあり。寺
院とみうけたれバ何卒一命を
助けたまへとよばはりけるに。
寺のうちより然らバとこたへ
いりて委細をかたるべしとて門
を開き住僧の居間へともなふ



ひぬ。○抑此寺ハ三界山無
縁寺と號し住寺を徳賢
上人とよびて道徳いとど
き聖にておはしけるが。今
甚内が為体を見るより。
不審に思ひ上下見れバ殊の
外あわてたるやうすなれバ。
何ゆゑやらさる変前後
そろハず。一向にわかり難し。
甚居多年にたすかと。○此



山中にある妖怪あることをきかず。これハ全く汝身ことを
まで。さまぐの悪事をおかさしむる也ふく妄像妄
念の業ゆへて心の鬼の身をせむるの道理なり。されバ
懺悔ないはある罪をもめつするといへバ佛前にて
これまで尽せし悪事をさんげあるべし然バ貧道
まさしき経を誦して幽魂を慰すべしといふに甚内ハ詮方
なく語るやう一拙者ハ原武州の生入間郡浅草
のほとりに住ていとまづしきありしがわまりて不
仕合つゞきく故郷の住居もなりがたく一年京都へ
登り一稼してえんと菅根山をあゆるとき一個の侍

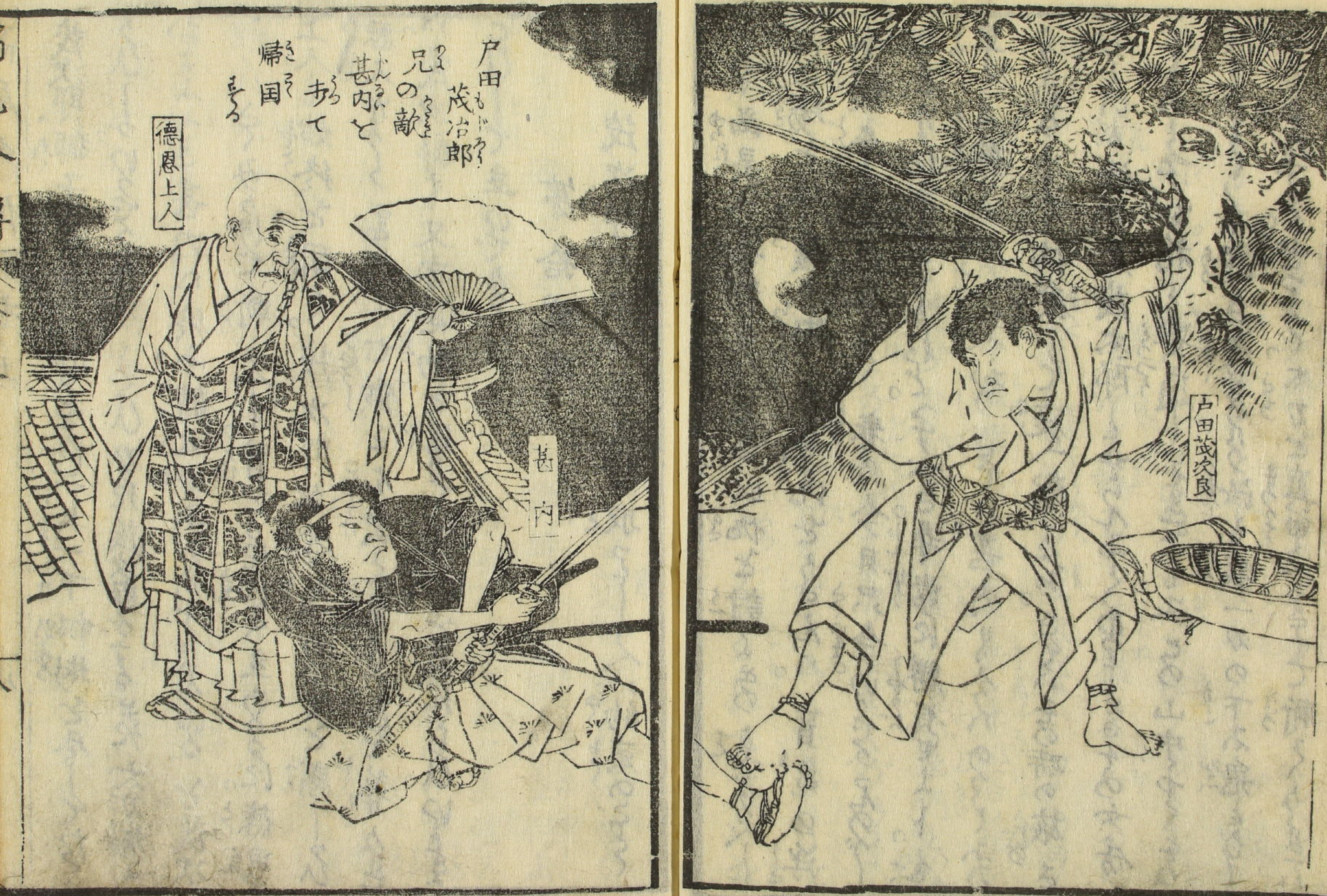
途中にて病におかされて立さりて介抱せんとして
思はず懐中へ手を入れしに財布の金あまたありし
がぞれのうのきびき引ぼさんとするに彼旅客も武士の
事なれバ苦しきながら刀をぬいてくるに切てくるに詮方
なくその刀をもぎとり何の苦もなく切ころし懐
中の金をうばひ上方へ登りその金を元手として稼
けるに仕合よく漸くに家賃の身となりし由数又金を
入れて高利をとり活業とするにつけて町人にて八
無理ありとれバ宮方の家隷分となり二刀を帯し
名も向阪甚内とあらため此度江戸へくだり故郷へ

をくり。猶些の金を里人に貸して世をおくりしうち。同し里なる戸田何某の娘を。そるはいまのをかん初め
いかにもして聟にならんとその継母へ多くの金子をあ
くまでたく訛をなしく。やうやくと聟にはなりつれども其の
娘はなにぶんそれをいやがりて心に順はず詮方
なさに終には継母が花をとる女と通じ毎日奢つよきを
極しかバ。次第に貯へもうすくなりゆくまゝに又一憎
の悪念きざしその娘を吉原へ売渡し継母をもあざむ
ひ去年の今日此山中を通りしが不図彼の女をうしな
はんと思ふ心いで来てかしこの谷へ突落して。それより

草津へわたり又一年の月日を送りしが此節急に江戸
へ呼ばれバなしかね用事のありて去年の事を思ひ出し
此所を通りしに日ハまさに高しとおもひのほか天陰
にかきくもり雨さへ降いだし急に闇くなりければせん
こせし所に火の光の見ゆるにそれは人家ならんと
いそぎしに忽地向ふの火ハ消えて去年お花を突落せ
し谷のほとりより陰火もえ出ておはなが亡魂いまも恐ろし
げなる顔色にて其を追来りしゆゑたゞ足にま
かせて逃来りしが出家ハ人を助けるが役目なりと
聞バ。わが一命を助けたまはれと涙ながらに語り

ける處に青龍無間寺に一夜の舎りをたのミ。泊り居たる六十六部ありしが客殿にありて委細の物語を聞て。此席へおどり出て甚内とおもひしハ吾を誰とかおもふ今汝が語つる皆根の山中にて殺害されし戸田茂太郎が弟同苗茂次郎とハわれなり兄の仇をうたんと年頃諸國をめぐり去年山谷薩をとほりしに不慮嫂が死骸に逢ひ其ころハ甚内といふものとハしりたれどその甚内をさがし多年たづねたる兄の敵といひ嫂も吾倍も今日が日までもたづねありしを今汝がさんげするしに自分の口より白状するハお花

どめし幽霊の導きなりして吾に仇を討よとの事なるべし法の場を修羅の街になし仇をうたんハ。盲亀の浮木優曇花の花さく春の今日只今めぐりあひのがし恐れおほくもあらねど。手すべき尋常に勝負せよと下手早く身拵して廣庭へおりそびは甚内も今ハのがるべき様なく仕度して庭へおりたち。さてハその時の旅さむらいが汝が兄茂太郎とむらんなくあまりさその女房とも不知ずお花と密通しそれとも見この山中にてすまいよく深き縁ありし汝も我一刀の下に鬼となしてくれんずと身上げて太刀を真甲にかざして斬てかゝるハ


戸田茂次良
戸田茂治郎兄の敵甚内と歩て帰国する
徳恩上人
甚内

茂次郎ハ獅子奮身の怒りを急し一上一下秘術を尽してたゝかひしが。いかさま孝烈ふかひなりし茂次郎がするどき太刀崎におよぶべき甚内ハ終に請太刀になりて見ゆる。と茂次郎ハそこみかけて斬たふし首をうち切て立あがるに徳昌上人も始終を聞く。茂次郎が孝義のほどを感じたまひ悪人ながら甚内が亡骸をも受て厚くこれを葬たまひハ茂次郎も又布施物を送りて僧侶をねぎらひいとまこひして立いでたり。

第拾貳回

偖も茂次郎ハ兄の仇を討取つたるうへハ約束のごとく

立帰つゝ千代田殿につげんと道をいそぎしに浅草が原まで来るに泣入る女を漁師ていの男引立行に逢へり。茂次郎ハ通りすがりにその女を見るに、とまれ姪のおてるなりけれバ高尾にゆかりありしかバ。茂次郎ハその縁故ハあらねども必定勾引の類ひならん廓より豪奪せられしなるべしと推し一言の問答にもおよばず引捩ぢく破らんとせしが彼漁師ていの若者ハふりかへりけるものを以てあしらひたるが。茂次郎が太刀先彼若冠が肩先にあたり。鮮血さつとほとばしるとひとしくあたりの濵べへでよん人ならず若者がふりまはしたるの先又茂次郎が

向顳にあてつく。おびたゞしく血しほながれいでゝ。かの水溜
りに流れしに。不思議や両人が血汐ハ一ッにあつまり
て。かたまりもあへざりしに。茂次郎ハ信と目をつけ。親子兄
弟の肉身ならバ。血汐水に入る時ハかならず
一ッに集まる。流れずと聞しに。今汝が血と某が血と
一ッになりて流れざるぞ不思議なれ。且汝ハ何
國の者にして。何の由緒ありて這女を誘ひしぞと
よばゝるやと問ふに。彼男ありしバその子細をかたるべし
生力をかためてとふに。茂次郎ハ手早く白刃を
納め。汝ハ定めし勾引の類ひなるべし。真直に白状すべ

し。といへバ彼若者茂次郎にむかひ。一勾引との汲月
遠ひ無理なる事ぞ。全く左様の者にあらず。私ハ
宮戸川の辺りに住む揖藏といふ船頭にして一個
の母を持ちて。夕夜網にいでゝ石濱の川辺にありし
る所に。何者とも知れず追はせられし思はく船
へ乗りて来る者あり。よく見れバ年のころ
女なり。きつく抱して幽く人心地もなく。何
呼ぶなる人と見れバ。これ三浦屋の揚君に高尾と
まいし人なく。獨りまたのこともなく一度郭へ
逢ひしことなれど。吾も其後とても。いづれをさたし

嘆く〳〵しるしが。もろちずその危急をすくひし
ハ尽せぬ縁なれバ。いざや縁の方まで送りまゐらせんと。
さりしもその暁共侶にところをすぐるなりされど吾形
と高尾どのゝ形と流り合ぬ由縁に勾引とおぼしめ
されしも理なり。シテ又此女ハ何人なれバ只一言の詞
をもうけのがさず。吾ま切くろりのひうるにやト押返
して問ふに浅次郎ハ「その不審さることなり。吾ハ
とまるる高尾が伯父なりしく浅次郎とよびくるものなる
り。さて不審なるハ主方が血汐と吾ちしれの一ツに
なりしハ。此方にすこしの心当てあり。汝ハ今に

父母ともに存生ありやなしやと語れとの給ふ。揖蔵
ハ「されバ父ハ先達て亡なり母ハ猶存命なれど
も。これとても実の母ならず。此身ハ三弐の時三社まつ
りの捨子なりしよし。その時刀の割笄の隻をもちゐし
りしよし。近頃まで大切にもちありしが。去ころ
どや吾妻橋の紅中にくりふるいたりト語るを聞
く浅次郎ハ我子覚太郎にてありけるかと
にも幼顔に見おぼへありとさすればこれ高尾のお
てる事ハ実の言号にして従者同士なりと聞く高
尾ハ大に駭き。前年甚内どのが言号の事と

ひされど。何とも怪しき由来。其所にあるべくハざり
しかをさして偽りなく。実の親子ハこの揖藏どの
なくありけるを そのときハ知らねど いろぞや廓にて
仮初に夫婦のけいやく共せしも。否といはれぬ縁し
なりぞかし 語るを聞く茂次郎も。その奇縁を感じ
すぐさま揖藏が家にいたり母に委細をものがたり。
又高尾にハ早速峠やく首尾よく欽甚内をとう
ちとりし一五一十をまたにあぞ。高尾もよろこびあへ
めでたく事ゆゑようして共侶に。千代田殿に偶し侫
讐のあらましを言上するにぞ。松之丞ともに喜びの

支にかゞやしめし 約束のごとく戸田茂次郎にハ職
録をあたへて。家来となし 又揖藏をも高尾と夫
婦となして 渠が養父の姓渡辺を名のらせ伊右衛門と名を
あらためさせて もとのまゝに千代田家の家臣となしぬ さるに
どに千代田どのハ名君のうへに忠臣ハ孝子の門におい
て出ると。渡辺伊右衛門ハ民間に育てまさしく文武に長ず
るのみにもあらねど。年頃継母に孝行等閑なからずと
聞かれ。これ予が愛する所の第一なりとて重く用ひ給ひ
ければ揖藏の伊右衛門も。又忠勤無二につとめし程によ
く家内和順して。めでたき支のうちつゞきたる趣り

首尾よく敵をうつ
戸田
渡辺
是より
両家
さかへ
目出度
万歳を
唱ふ
戸田茂治郎
漁師 樽蔵
高尾

千代田松之丞

けるかどふ。茂次郎ハ数年勤仕なしけるが。ゑやその年
も早百ふかゝりしかバ身のいとまをたまハりて待乳山
の麓ふ退隠し名を茂睡とあらためそのゝちハ風雅
の道をこのミ月雪花ふ思ひをのべしが。終ふその
道ふ感能し。戸田茂睡とも又隠家の茂睡とも
よびく和哥の道ふて世ふあらハるゝほどの名誉の人
ときこえねさまれバ今の世までも待乳山ふのこれる辞
世の一首「哀とハいふこゑくゆく人も足をとめ待
乳の山ふのこすこの景」と打ねて石ふぞまりぬ。
茂睡ハはちくしく思ふ吾兄茂太郎ねしその

以前夫婦なるをも文治高尾が墓ふまうでゝ怪
風ふあひ且その為ふ感じて。か照をたすけあひし。
あしさすれバか照ハ初代高尾が再来ふして。
赤主以前より。烟花の流れふあるびべき支とあ定
まりし定業なるべしと「伊右エ门夫婦ふ語りき
くせ常ふ初代高尾が追善供養ふおとりなく勤
めしかりや彼のその以前ふ花ふうらみをこめしハ照を
豪奪せし暑氏何某ハ甚内が類ひの悪混あ
く終ふ公のとがめをうけく刑せられしとぞ。されバ
悪人ハ亡び善人栄ゆるなと。照くとして鏡のごとく。

戸田渡辺の両家共に。めでたく栄えとしの内おつ至て。歓びを重ぬ

繪本報仇高尾外傳巻之五 大尾

軍書小説類蔵板目録

大坂心斎橋通 北久寶寺町 河内屋源七郎

書名	備考	冊数
楠二代軍物語	平かな絵入	五冊
楠正行戰功圖繪		十冊
神功皇后三韓退治圖繪		五冊
九州諸將軍記		十二冊
繪本雪鏡談	春曉齋作 制画	十二冊
同 金花談	春曉齋作 并画	十二冊
同 孝感傳	同前	十冊
同 亀山話	同前	十冊
同 顯勇録	同前	十冊
同 忠孝二見浦	南里亭其楽作 柳齋重春画	十冊
同 月宵鄙物語	真顔作	十冊

復讐岩見英雄録 初編 七冊

同 二編 東海 玉藻隠士 編述 七冊

同 三編 小澤東陽主人 編述 八花亭冨重 画 七冊

復讐岩見英雄録 第四輯 東海 玉藻主人 編輯 浪花 鶯齋 歌川芳梅 画 近日發販 七冊

本輯は[illegible]七人の武者修行[illegible]若見[illegible]野[illegible]十郎と[illegible]五輯[illegible]羽州の[illegible]條[illegible]の大敵を[illegible]快諾之

祐天上人一代記圖會 六冊

祐天上人 一死靈解脱物語 二冊

繪本誠忠傳 速水春暁齋 作 同画 十冊

同 合邦辻 同前 十冊

同 芦芽草紙 浪花 [illegible]子 著 石田玉山 画 十冊

同 淺草靈験記 春暁齋 作 同画 十冊

同 忠孝美善録 東籬亭菊人 編 春暁齋英信 画 十冊

同 彦山靈験記 速水春暁齋 作 仝画 十冊

同 二蔦英勇記 同前 十冊

同 金毘羅神霊記 同前 十所

新累解脱物語 曲亭馬琴 著 葛飾北齋 画 五冊

昔語質屋庫 曲亭馬琴 著 勝川春亭 画 五冊

同 中編 追刻 五冊

同 後編 追刻 五冊

[illegible]の[illegible]珍物の[illegible]質屋の庫に各身の上を[illegible]古来[illegible]の[illegible]中編後編[illegible]川子の[illegible]奇の[illegible]

朝比奈巡嶋記 自初編至六編各五冊 曲亭馬琴 著 歌川豊廣 画 卅冊

同 七編 楳亭金水 編述 葛飾為齋 画 五冊

同 八編 同前 五冊

曲亭翁の旧著にして鎌倉の時[illegible]を知る史外の奇書[illegible]七輯を[illegible]朝比奈義秀[illegible]使[illegible]信[illegible]の[illegible]

小栗外傳 小枝繁 著 北齋 画 [illegible] 十冊

繪本忠臣藏 平安 速水春暁齋 作同画 十冊

同 後編 十冊

同 拾遺 追刻 十冊

拾遺の一編は義士[illegible]復讐の[illegible]烈の美談を[illegible]

畫本西遊全傳 浪華 [illegible] 譯 岡部 大原東野 画 十冊

同 二編 十冊

同 三編 [illegible] 画 十冊

同 四編 同前 十冊

[illegible]演義三國志水滸傳金瓶梅[illegible]大奇書[illegible]絶妙の作[illegible]

松染情史 秋七種　曲亭主人作　六冊
石言遺響　同前　蹄斎北馬画　五冊
遠江の国小夜の中山なる夜泣石の…
月氷奇縁　同前　五冊
金花夕映　梅暮里谷峨作　北嵩画　五冊
孝子嫩物語　蘭山作　五冊
絵本三夜船譚　六冊

絵本那智白糸　蘭山著　北馬画　六冊
同 魁草紙　五冊
同 奈古曽の関　感和亭鬼武作　蹄斎北馬画　五冊
同 平泉実記　十二冊
同 自来也説話　感和亭鬼武作　十二冊
同 只之碑　五冊
風流俄天狗　前編 後編　十冊

小野篁　一冊
復讐彩瀬物語　栗杖亭鬼卵著　北明画　七冊
閑際筆記　懶斎藤井先生著　三冊

紙治小春 楮生談　東遊作　春英画　五冊
復讐妻物語　六冊
同 安達ヶ原　六冊
再開高臺梅　六冊
絵本白璧草紙　六冊
見外白宇瑠璃　五冊
通俗巫山夢　十返舎一九作　五冊
貧福太平記　三冊

教訓鄙都言種 前編 後編 全四冊

雨月物語 上田秋成著 五冊

桂林漫録 桂川中良先生著 二冊

好古博識和漢の雑事を勝りし蔵筆なり 大坂の書人の益ありて面白き書なり

合戦評判

古戦評判

続古戦得失論

百家琦行伝 五岳著 五冊

播州 続膝栗毛 二編追加 一九作 二冊

美作孝民伝 十冊

三條小鍛冶名釼由来

昭代著聞集

太平記 片仮名 大字 廿一冊

続太平記

荘門照編輯

新編 続詩学精選 小本 全六冊

此書ハ去ル明治十二年上梓発兌セシ處大ニ江湖諸君子ノ賞誉ヲ得其販売高既ニ数千部ニ及ベリ實ニ全編ヲ…

（果品）（禾蔬）（飛禽）（走獣）（鱗介）（昆蟲）（天文）（地理）（人事）（器用）（飲食）（草木）（百花）

大阪心斎橋通

前川源七郎 蔵版